手向神社と
末社の石仏

俱利伽羅石仏調査資料

金沢市 滝本やすし

2017/01/15

手向神社と末社の石仏

滝本 やすし

はじめに

平成二十四年十月、故・久世嘉太郎氏の作品展が津幡町で開催された。絵画や仏像彫刻などの多彩な作品が並べられていた。その中で倶利伽羅三十三観音の押し絵や、それぞれの観音を詠んだ歌が目にとまった。押し絵とは久世氏の詳細なスケッチである。倶利伽羅の三十三観音については『倶利伽羅峠の三十三観音めぐり』(平成四年／小矢部市教育委員会・小矢部市婦人ボランティア育成講座)に調査報告されている。これは故・京田良志氏が監修されており、詳細な調査報告資料である。これらの資料をもとに池田紀子氏と、倶利伽羅三十三観音の現状調査を行った。調査は平成二十四年十月中旬から十一月中旬にかけて数回行った。一日目は三十三観音のうちの二十九体を確認し、後日あらためて残りの四体を確認した。二日目はその残る四体の確認だったので、倶利伽羅山中や周辺地域の他の石仏も合わせて調査を行った。この調査では『野仏』(平成四年／津幡町津幡公民館・たんぽぽグループ)と『ふるさとの石仏 第一集～第十二集』(昭和五十五年～平成二年／小矢部市婦人ボランティア育成講座ふるさとグループ)を参考にした。さらに後日、砺波市の尾田武雄氏と共に、手向神社と末社に関係すると思われる石造物の再調査を行った。また手向神社を兼務されている津幡町竹橋の倶利伽羅神社の十握龍也宮司に、資料提供や調査協力をいただいた。十二月二十三日に宮司と氏子の方々のご厚意で、手向神社石殿内の御神体を調査させていただくことができた。そして翌平成二十五年五月十日には、竹橋倶利伽羅神社に祀られている御神体も調査させていただいた。これらの調査を含め、津幡町倶利伽羅、笠谷、小矢部市埴生、石動地区等の石仏・石塔の調査を行った。

倶利伽羅三十三観音の現状については別稿での報告として、ここでは手向神社やその末社に関係すると思われる石仏や石神等の報告をしたい。

手向の神

手向の神は峠やその麓にあって、旅の安全を守護する神である。手向の神の語源は、花などを手向けることに由来すると言われる。手向神社は全国に分布しているが数は少ない。氷見市柳田の手向神社や小矢部市松尾の手向社(松尾神社に合祀)では、道の神である猿田彦神を祭神としている。

手向の神の発祥は不詳であるが、『万葉集巻十七』に「刀奈美夜麻 多牟気能可味(砺波山 手向の神)」と詠われている。砺波山(倶利伽羅)の手向の神であることが記されている。

また『三代實録巻三十三』には「元慶二年五月八日癸卯、授二越中國正六位上手向神従五位下一」と記述されているのだが、越中国の何処の手向の社であるのかは記されていない。

倶利伽羅の手向の神は、砺波山の峠にあって、当初は道中安全を祈願する道祖神的な要素が強かったのであろう。

長楽寺

長楽寺は高野山真言宗の寺院で不動明王を本尊としていた。「加州倶利迦羅山不動尊縁起」(倶利伽羅不動寺所蔵)によると、養老初年に善無畏三蔵が来日して創建したとされる。また「倶利迦羅山古力迦羅竜王起源」(金沢市宝集寺所蔵)では、養老二年三月に善無畏三蔵がこの峠に登り、池に住む大蛇を退治して倶利伽羅龍王の像を書き残した。そして弘仁三年、空海がこの地を巡錫の折に寺を創建したとされる。

寿永二年、このあたりは源平合戦の舞台となった。兵火によって堂宇が失われ、寺は衰退した。そして慶長年間、加賀藩三代藩主前田利光(後に利常と改名)の命で、秀雅上人により再興された。天保七年十一月七日に門前の茶屋

から出火し、宿坊以外を全焼した。仏像や他の宝物等は、延焼前に持ち出された。その後仮殿が建てられたのだが、明治二年十二月、神仏分離の際に廃寺となった。

長楽寺の仏像

明治の神仏分離以降、長楽寺の仏像等は近隣の寺院に譲渡された。その主なものを列記すると…

◎長楽寺本尊の不動明王、愛染明王、千手観音、善無畏(像容は弘法大師)→金沢市寺町一丁目の高野山真言宗宝集寺。

◎倶利伽羅不動→倶利伽羅の高野山真言宗不動寺。

◎仁王、十王→小矢部市埴生の浄土宗医王院。

◎延命地蔵、大般若経六百巻→小矢部市観音町の高野山真言宗観音寺。

◎阿弥陀如来→津幡町倉見の浄土宗専修庵→倶利伽羅の高野山真言宗不動寺。

◎秀雅上人像→俵家→倶利伽羅中坂の秀雅堂。

また倶利伽羅山中の石仏も近隣の寺院や個人宅に譲渡され、守られてきた。しかし石仏の譲渡に関しては、口伝のみで確かな記録が残されていないものが多いようである。

長楽寺墓地の石塔・石仏

四社権現の南に長楽寺の墓地がある。現在は公園が整備され、墓地とつながっている。墓地の入り口には、万葉集の手向之神の歌碑が建てられている。墓地には十数基の墓標と数体の石仏等が点在しており、これらの石仏も墓標として彫られたものである。墓地のいちばん奥には十握家の新しい墓標が建てられており、近年は一般の方々の墓標もいくつか建てられている。

無縫塔は五基現存しており、もっとも大きなものは長楽寺第六代圭傳の墓標で、寛保元辛酉歳三月八日寂の銘が読み取れる。十握家墓所のいちばん奥に建てられている無縫塔が秀雅の墓標であろうか、磨滅が激しく刻文は全く判読できない。赤戸室石製の笠付型の墓標は第五代周傳の墓標で「元禄十丁丑年／八月■日寂」の銘が入っているのだが、明治初頭に書かれたと思われる『倶利伽邏山長楽寺系図』(十握家所蔵)には元禄十年三月一日寂と記されており相違がみられる。笏谷石製の笠付型の墓標は第十六代寛龍の墓標で「文化十酉年／九月三日寂」の銘が刻まれている。笏谷石製の舟光背型の半跏地蔵は「阿■梨観秀／寛政六甲寅年／五月四日」の銘が入っており、第十四代観秀の墓標である。また墓地内には、これらの他に一石五輪塔や宝篋印塔の残欠などもみられる。

公園整備の際に、今石動城代篠島織部清了の墓が発掘されている。これには、清了の五代目の孫である清英によって元禄十四年に再興されたことを示す銘文が刻まれている。私自身は精読していないので『歴史秘話 倶利伽羅峠』(昭和六十三年／高山精一)に記されている銘文を転記する。右扉は「卒元和元乙卯／清了院殿松■示芳居士俗名号篠島織部／十月」、左扉は「傾覆篠■後嗣第五世之孫主馬清英再興之者／元禄十四年己年十月晦日」。

赤戸室石製の角柱型の石塔は、正面に観音立像を浮彫りにし、左側面に大日報身真言の「ア・ヴィ・ラ・ウン・ケン」の梵字を刻み、右側面には「南無妙法蓮華経」の髭題目を刻んでいる。裏面に銘文が刻まれているのだが、磨滅が激しく、「九月十七日」を判読するのみである。長楽寺歴代の墓標ではなく、武家の墓標と思われる。この石塔は、近隣の日蓮宗寺院が関係しているのであろうか。小矢部市八和町の日蓮宗本行寺は、以前は津幡町にあったので、山号を津幡山(シンパンサン)と称している。本行寺は今石動城のすぐそばであり、墓地には前田利秀の墓標である五輪塔が建てられている。今石動城代と長楽寺および本行寺との関係がうかがえるようだ。

手向神社とその末社

手向神社と末社の御神体を考察するにあたり、『歴史秘話 倶利伽羅峠』に記載されている明治四年の『社号書上帳』の記述を転記しておこう。

加賀国河北郡倶利伽羅村鎮座

⑴素戔嗚社式外

一、社頭七間四方但シ天保七年十一月四日
焼失ニ付仮殿

一、祭神　素戔嗚尊
養老二年三月勧請・倶利迦羅大龍
不動ト唱候処御一新ニ付相改

一、神位　無シ

一、祭日　三月十八日、八月十八日

一、社地　九千八百三十二歩計
二万千四百十一歩　計地子免除地
内　四百五十二歩計畑
内　二万九百五十九歩計　雑木林

一、元正天皇勅願所ノ由候復共証書焼失不詳
宸幹等無御座候

一、社領　現米高六十二石二斗八升三合
河北郡倶利伽羅村地内
建久七年十月征夷大将軍頼朝
郷依リ為領内指四至寄附書見在

一、神職　白普請付候

一、付請に候処明治三年十月神職白普請申付候
摂社……本社々鎮座地

⑵御影社

一、社頭　九尺四方

一、祭神　素戔嗚尊　勧請未詳
末社本社々地内鎮座

⑶峰御前八幡宮

一、社頭　四尺五寸二三尺五寸

一、祭神　応神天皇相殿菅原利家郷
勧請年記未詳
末社本社々地内鎮座

⑷愛宕社

一、社頭　三尺五寸二三尺

一、祭神　軻遇突智命勧請年記未詳
末社本社々地内鎮座

⑸白山社

一、社頭　三尺五寸二三尺

一、祭神　菊理媛命　勧請年記未詳
末社本社々地内鎮座

⑹大峰座主社

一、社頭　三尺五寸二三尺

一、祭神　国常立尊　勧請年記未詳
末社同所字猿が馬場ニ鎮座

⑺日吉社

一、社頭　五尺二四尺五寸　鳥居一ヵ所

一、祭神　大山咋命　勧請年記未詳
末社　同所鎮座

⑻勝手社

一、社頭　三尺二二尺五寸　鳥居一ヵ所
末社　同所鎮座

一、祭神　神号不知　勧請年記未詳

⑼稲荷社

一、社頭　三尺二二尺五寸

一、祭神　倉稲魂命　勧請年記未詳

末社　同所鎮座

⑽辻宮八幡宮

一、社頭　三尺二尺五寸

一、祭神　応神天皇　勧請年記未詳

末社　同所鎮座

⑾富士社

一、社頭　六尺二五尺

一、祭神　木花開邪媛命　勧請年記未詳

一、神職　十握　喬　正龍

右家一助真言宗二テ長楽寺ト称来候処、

明治二年十二月復飾申付候

手向神社と末社の祭神について

『社号書上帳』には、素戔嗚社の本社、末社を合わせた十一社の九柱が記載されている。また『石川県神社庁ホームページ』によると、現在では、手向神社は神功皇后を合祀している。

◎素戔嗚尊（建速須佐之男命）は伊弉諾命と伊弉冉命の子。天照大神の弟。櫛名田比売（奇稲田姫）を妻とする。後に神大市比売（大歳御祖神）を妻とした。八岐大蛇を退治したことで知られる。祇園信仰、津島信仰、氷川信仰の祭神とされる。全国の八坂神社、素戔嗚社の総本社である京都八坂神社の主祭神。明治の神仏分離の際に、祇園神社から八坂神社に改められた。祇園信仰、津島信仰では、本地は牛頭天皇とされる。

◎応神天皇は第十五代天皇で、誉田別命。仲哀天皇と神功皇后（気長足姫尊）の子。日本武尊の孫。仁徳天皇の父。全国の八幡神社の総本宮である宇佐神宮の祭神。本地仏は阿弥陀如来。

◎菅原利家は、加賀藩初代藩主前田利家。

◎軻遇突智命（火之迦具土神）は火結命と同一神であり、伊弉諾命と伊弉冉命の子。愛宕神社総本社の若宮の祭神。愛宕神社における本地仏は将軍地蔵。また江戸時代以降、秋葉山本宮秋葉神社の祭神にもなった。秋葉神社では三尺坊を秋葉権現とする。火の神であり、火伏の神である。

◎菊理媛命（菊理媛神）は白山比咩神と同一神。『古事記』には登場せず『日本書紀』の一説に記されているのみである。伊弉諾命と伊弉冉命を仲直りさせたとされる。白山三宮の祭神であったが、江戸時代初期より白山本宮の主祭神となった。本地仏は十一面観音。

◎国常立尊（国之常立神）は、神世七代の初代神。独神（性別のない神）で、姿を現さない。国土の守護神。本地は蔵王権現。なお蔵王権現は、大己貴命、少彦名命、日本武尊、金山毘古命の本地でもある。

◎大山咋命（山末之大主神）は、大年神とアメノチカルミヅヒメの子。全国の日枝神社である大津市の日吉大社東本宮の祭神。西本宮の祭神である大物主神との二柱を山王と称する。また松尾大社の祭神でもあり、全国の松尾神社の祭神となっている。

◎倉稲魂命（宇迦之御魂神）は、素戔嗚尊と神大市比売（大歳御祖神）の子。全国の稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社の祭神。本地仏は荼枳尼天。

◎木花開邪媛命（木花之佐久夜毘売）は大山祇神（大山津見神）の子。石長比売（磐長姫）の妹。天照大神の孫の瓊瓊杵尊（邇邇芸命）の妻。全国の浅間神社の総本山である富士山本宮浅間神社の祭神。社伝では、木花開耶媛命は水の神であり、噴火を鎮めるために富士山に祀られたとしている。安産の神とも云われる。またホデリ・ホスセリ・ホオリを火中出産したことから火の神ともされる。初代天皇である神武天皇は、ホオリの孫である。木花開耶媛命は酒解子神とも称され酒造の神ともされている。本地仏は大日如来。

◎神功皇后は、息長宿禰王とカズラキノタカヌカヒメの子。第十四代仲哀天皇の皇后。気長足姫尊（息長帯比売命）。応神天皇の母。全国の八幡神社の総本宮である宇佐神宮の、八幡三神の一柱。全国の住吉神社の総本社である大阪の住吉大社の、住吉大神の一柱。

手向神社石殿と御神体

明治初頭の手向神社については『民俗民芸双書90・信仰と民俗』(昭和五十七年／小倉学)に「古老の伝承を書き留めたと思われる小島伊三郎氏の手記」として、次のように記述されている。

時ノ住職ハ明治元年神仏混淆廃止ニ付、同二年十二月由緒アル長楽寺ヲ廃シ復飾セリ、同四年社領ハ上地トナル、同五年不動堂ヲ社殿トナシ手向社ト称シ、同六年郷社ニ列セラル、護摩堂ヲ奥ノ院ニ移シ、十握喬神職トナル
護摩堂ノ鏡板ニ彫刻シアルハ大童子・三十六童子像ヲ石工ヲ雇ヒ削除キ、此石堂ヲ本堂跡ヘ移シ手向神社ノ奥ノ院トシ[現存シルモ毀損シテ古ノ観ヲ失フ](以下省略)

現在の手向神社の石殿は、長楽寺の御影堂であった。明治の神仏分離の際に長楽寺は廃寺となり、長楽寺の仮殿が素戔嗚社として残された。明治四年の『社号書上帳』には、本社は素戔嗚社式外、長楽寺の御影堂であった御影社が摂社と記されている。素戔嗚社は、明治五年に手向社と改称、明治六年に郷社に列し、明治七年に手向神社となった。明治五年の絵図には長楽寺の仮殿が「本社七間四面」、現在の和光塔の位置に「摂社／石殿九尺四方／四方高欄付」が描かれている。『民俗民芸双書90・信仰と民俗』によると明治六年にこの石殿が手向神社の本殿にあてられて移築されたとされているが、『津幡町史』に『石川県史蹟名勝調査報告第二輯』の大正時代の手向神社の写真が掲載されており該当地には木造の社殿が写っているので石殿の移築はそれ以降に行われたのであろうか。昭和三十五年に不動寺境内の南東隅に、北に面して移建。昭和四十七年に現在地に移された。

長楽寺廃寺に伴い、勝龍住職は十握喬として神職に専念することになった。十握家は昭和九年に竹橋へ移られ、現在は龍也宮司が倶利伽羅神社を務められ、手向神社を兼務されている。

手向神社の石造神殿は、笏谷石製で九尺四方。慶長十六年に加賀三代藩主利常が兄利長の病気平癒を祈願して立願、同十九年に落成。石殿の壁面に彫られていたのは不動明王の眷属である八大童子と三十六童子であり、これらはすべて削り落とされ、その痕跡も僅かである。この石殿は長楽寺の護摩堂との記録もあるのだが、内部には護摩を焚いた形跡はみられない。

『社号書上帳』には、御影社(手向神社)の祭神は素戔嗚尊と記述されている。また『石川県神社庁ホームページ』によると、現在では神功皇后(気長足姫)を合祀している。石殿は木造の覆殿に納められており、幣殿と拝殿が連なっている。これらは昭和四十七年の石殿移建の際に建てられたものである。

石殿内には、石造の御神体が祀られている。大きな板状の凝灰岩製で、剣に龍が巻きついた姿をした倶利伽羅不動を浮彫りしている。下部には二体の眷属が彫られており、向かって右が制吒迦童子で、左が衿迦羅童子である。制吒迦童子は天に向けて弓を構えて矢を放ち、衿迦羅童子は地に向けて弓を構えて矢を放とうとしている。また台石には輪宝が薄く浮彫りされている。本体の高さ118 cm、幅46 cm、奥行9 cmで、台石を含む総高161 cm。長楽寺不動堂の本尊(現在の不動寺の本尊)と像容が同じであり、この尊像を模して作られたと考えられる。石材や手法からみると、近年の作のようである。この御神体は石殿建立当時のものではなく、現在地に移建された際に作られたものではないかと思われる。

手向神社裏手の茂みの中には、石造大蛇(上部のみ)や五輪塔の残欠などが点在している。現在の手向神社石殿内には石造の倶利伽羅不動が御神体として祀られているが、この石造大蛇がそれ以前の御神体であろうか。

『民俗民芸双書90・信仰と民俗』には、倶利伽羅不動の縁起として次の四点が紹介されている。

①加州倶利迦羅山不動尊縁起(倶利伽羅不動寺所蔵)
②倶利迦羅山縁起(金沢市立図書館所蔵)
③倶利迦羅山古力迦羅竜王起源(金沢市宝集寺所蔵、写本が二点あり)

④倶利迦羅不動濫觴記（金沢市泉野桜木神社所蔵）

①②③は、それぞれ表記は異なっているが、おおむね同じ内容が記されている。魔鬼である剣を、龍王が退治したとされている。これらの縁起に記されているのは、剣に龍が巻きついた姿の倶利伽羅不動である。これは長楽寺不動堂に祀られていた木像で、手向神社から不動寺に譲られ、現在不動寺の本尊となっているものである。

④は明治初頭に、手向神社の十握喬宮司によって書かれたものではないかと考えられ、「本文の一部を抄出する」として次のように記述されている。

倶利迦羅不動濫觴記

当山不動尊濫觴者、本朝五畿七道開、北陸道当所往来ノ傍ラニ池在リ、悪蛇住ミ常ニ焔ヲ放ツ故ニ往来ノ旅人等毒気ニ当リ忽チ鬼病ヲ請ケ煩ヒ死スル者数多、且ハ乗気一天ニ曇リ雨降永ク不止、故五穀不熟国家万民ノ患ヘ不少、然ルニ養老二年三月、南天竺密教五祖善无畏三蔵大日経五部秘経七軸ヲ所持、国家鎮護之法門ヲ弘メント天竺ヨリ唐渡日本ヘ渡リ、北陸道順路ノ所当所ヘ来リ給フニ、国家ノ急患諸人ノ急難ヲ為除シカ、右池ノ辺リニ一七日之間神剣ヲ祈リ降伏ノ秘法ヲ修シ給フニ、満日ノ暁ニ天ヨリ宝剣池ノ中ヘ飛ヒ下リ、悪蛇憤リ宝剣ヲ纏ヘ呑ント忿怒之相生身形体登天シ、国家鎮護ノ守神ト崇敬シ、三蔵登天ノ形体ヲ彫刻シ、剣索不二倶利迦羅不動ト名附、安置シ、池ヲ不動池ト唱ヘ、土地ヲ倶利迦羅ト名附

蛇剣ノ形体登天ノ後チ、当山ヨリ十八丁隔テヽ南北ニ池有リ、小蛇住ミ、三蔵降伏法神験ヲ祈リ給フニ、二童子出現シ、制吒迦童子ハ弓ヲ携ヘ天ニ向テ矢ヲ放ツ、衿迦羅患子ハ地ニ向テ弓ヲ携ヘ矢ヲ放ツ、天地ノ急患ヲ祓ツテ国家静謐諸民安穏ノ礎、是ヨリ北ノ池ヲ衿迦羅池ト名附、南ノ池ヲ制吒迦池ト唱ヘ、不動池衿迦羅池制吒迦池出現、三ツ池開闢ノ始メヨリ今ニ至迄減水転変無之、日本一社倶利迦羅不動降魔出現、国家之鎮護両部之守神竜王璽也、其ノ本地者素戔嗚尊、自天宝剣ヲ降シ悪蛇降伏登天ノ神験ヲ成シ給フハ神力也、往共素戔嗚尊、出雲国簸ノ川上ニテ八岐大蛇住ミ有八箇少女毎年所呑、稲田姫残リ巳ニ且タ臨破スル、素戔嗚尊十握ノ宝剣ヲ以テ八岐大蛇ヲ退治シ玉フ、其ノ大蛇ノ尾ニ一ノ剣有リ、所謂草薙之剣也、伝ニ倶娑那岐能都留伎一トモ、当山ノ御神体準之、大蛇ノ尾ニ剣有リ、素戔嗚尊社頭トモ可申、神代以来和朝国々悪蛇蔓リ人間ニ仇怨ヲ成ス事不少、素戔嗚尊始メ神力ヲ以テ降伏退治有テ多分竜神社祠ニ鎮座、信濃・諏訪・戸隠等本ト蛇躰竜神誕生ノ社頭何レモ太社、当社モ本ト悪蛇住ミ人間ニ仇ヲナスニヨリテ、天ヨリ宝剣ヲ降シ降伏退治ノ土地、神変不思議ノ神力也

此故、善无畏三蔵及奏聞、元正天皇・聖武天皇御両帝御感悦、勅願所蒙綸命、社堂等御造営莫大之料田ヲ賜下シ、国家鎮護ノ祈リヲ無怠慢勤修、倶利迦羅不動ノ開初也、善无畏三蔵真言ノ法門未タ時至、三蔵所持大日経五部ノ秘経七軸ヲ大和国久米ノ塔ノ真柱ニ籠置キ、三蔵帰唐シ給フ、其后チ、延暦ノ未年ニ弘法大師久米之塔ノ真柱ニ籠置彼ノ経ヲ開テ以之入唐シ玉フ、大同元年ニ帰朝、弘仁三年弘法大師化ヲ北国ニ施スノ時当山ヘ来リ、善无畏三蔵草創本尊ノ形体ヲ拝シ、十七日間国家鎮護之祈リヲ成シ給フ、其時脇立千手観音・愛染明王・善无畏三蔵ノ像三躰、弘法大師ノ御作ニテ安置勅願勤修ス、勅願之御綸旨等源平兵乱之砌焼亡、其后チ木曽義仲公神験之誓ヲ祈リ、平家ヲ亡シ得勝利事分明也、源頼朝卿、遠江守重頼公ヲ以テ社堂等悉皆御造営、建久七年十月十七日ニ被下置候御判物ニハ、彼等ハ霊験殊勝之砌利生掲焉地也、依之為将軍家祈願所、自今以後寺僧等可致勤行忠也、然則限永代東西南北指四至令寄附畢、但シ重科之輩於出来時者、為寺僧沙汰其身一人可搨出状如件、右御判物所持仕候

御当代御元祖様御始瑞竜院様御取立、為不動堂領当一村御寄附之御判物所持仕候、微妙院様社堂等悉皆御造営、改而為不動堂領ト当一村御寄附御印物所持仕候、松雲院様当一村百三拾一石七斗八升八合社領所附之御印物所持仕候、養老二年ヨリ千百余年之間興廃雖有之、社堂等連続全ク国家鎮護之御祈願勤修不致怠慢者也、不浄之輩ヲ忌ミ崇リ、別シテ死亡暨人躰不浄族往来通行之砌及案内ハ、丶、正面之門扉ヲシメ住縄ヲ張リ障碍不浄除ノ祈リヲ成ハ更ニ無崇リ、万一意得違者不案内ノ時ハ、雖晴天一時天曇リ雷鳴震動烈風雨降障碍ノ崇リ有事諸人皆ナ知ル所也、穴賢

素戔嗚尊が天羽々斬剣と称する十握剣で八岐大蛇を退治した時に、大蛇の尾から一振りの剣が現れた。素戔嗚はこの剣を天叢雲剣(草薙剣)と名付け、天照大神にささげた。手向神社裏手の石造大蛇はこの神話に登場する八岐大蛇であり、以前の御神体ではないかと思われる。笏谷石製の丸彫りで、首から上のみであるが長さ53 cm、首の部分の最大径は16 cm。

雨ざらしになっていたこの石造大蛇は、平成二十四年十二月二十三日の調査の際に拝殿内に納められた。護摩炉と思われるリング状の石片も同時に納められた。

十握剣(十束剣、十拳剣)とは、長さが拳十個ほどの剣のことである。素戔嗚尊の天羽々斬剣は十握剣であると言われ、岡山県赤磐市の石上布都魂神社に伝えられている。

『歴史秘話 倶利伽羅峠』には「手向神社神像版。神主十握喬(勝龍和尚)から十握家に伝えられてきた勝道作の手向之神。八岐の大蛇と天叢雲剣を線刻して祭神素戔嗚尊とする」として、厨子に納められた神像版の写真が掲載されている。この神像版は、十握家および手向神社や倶利伽羅神社には残されていない。所在不明となっている。

御影堂(現在の手向神社石殿)の壁面に彫られていたのは不動明王の眷属である八大童子と三十六童子であることから、当初この中に祀られていたのは不動明王(倶利伽羅不動)ではなかったかと考えられる。現在は倶利伽羅不動と制吒迦童子、衿迦羅童子の三尊が御神体として祀られているのだが、現在祀られている尊像は近年の作と考えられる。最初の尊像は明治の初めの神仏分離の際に外に出され、首から上の大蛇を作り御神体として祀ったのではなかろうか。そして昭和に入って(不動寺創建の頃?)現在の石像を作り、新たな御神体として祀ったのではないだろうか。そうすると最初に祀られていた像は消息不明となる。近隣には該当する石像などは見当たらない。

手向神社は明治四十年に辻宮八幡社を合祀しているのだが、辻宮八幡社の御神体と思われる像は石殿内にはみられない。またこの石殿内には、笏谷石製の十一面観音座像が納められているのだが、これについては後述する。

手向神社登り口の両部鳥居は昭和六十年に建て替えられたものであり、もとの笏谷石製の鳥居の残欠が新しい鳥居の両脇に倒れたままとなっている。そしてもとの鳥居の礎石一基が手向神社裏手の茂みの中に埋もれている。また古い笏谷石製の石灯籠一基も新しい鳥居のすぐそばに倒れている。

手向神社石殿の前には石鬼面二点、石造狛犬一体、一石五輪塔一基(空・風輪欠損)が置かれている。これらはいずれも笏谷石製である。また「五社権現」と書かれた額もそばに置かれている。

石鬼面は手向神社石殿の屋根にあったとされる。屋根に鬼面が掲げられていたことから、本来は神殿として建てられたのではないことがうかがえる。

狛犬は、以前は四社権現の前にあったもので、高さ47 cm、幅18 cm、奥行き52 cm。『石川県の歴史散歩』(昭和五十二年/石川県高等学校社会科教育研究会)に掲載されている四社権現石殿の写真には、石殿手前に二体の狛犬が写っているが、右の狛犬(阿形)は盗難にあい現存しない。

一石五輪塔は空風輪が欠損している。高さ46 cm、幅20 cm、奥行き18 cmで、正面に「ラ・バ・ア/為■■/逆■/■■/慶長二十年四月廿一日」、左側面に「ラー・バー・アー」、裏面に「ラン・バン・アン」、右側面に「ラク・バク・アク」と刻まれている。中坂の路傍より手向神社内に移された。

四社権現石殿

国見山頂に建てられている四社は、峰御前八幡社(祭神は応神天皇、本地は阿弥陀如来)、愛宕社(祭神は軻遇突智命、本地は将軍地蔵)、白山社(祭神は菊理媛命、本地は十一面観音)、大峰座主社(祭神は国常立尊、本地は蔵王権現)である。また『社号書上帳』には、峰御前八幡社祭神の応神天皇の相殿として菅原利家(前田利家)の名が記述されている。手向神社とこれらの四社とを合わせて、一般に五社権現と呼ばれている。以前は左から二番目にひとまわり大きい石殿が建てられていたのだが、古絵図には左端にその大きな石殿

が描かれていたので、修復の際にもとあった位置に並べ替えられた。

なお『津幡町史』には、『越の下草』(宮永正運)が、立山・白山・蔵王・石動・山王を五社権現、『越中志徴』(森田平次)が、白山・蔵王・富士・愛宕・八幡を五社権現としていることが記述されている。

四社権現の石殿は、すべて戸室石製である。もとは青戸室石製だったのだが、昭和二十八年の修復の際に赤戸室石が用いられた。そして平成十二年の修復では青戸室石が用いられている。左端のひとまわり大きい石殿が峰御前八幡社で、裏面に「延宝五㊀年／…■■／四社建立 平加賀守綱利公／九月八■■■」の銘が刻まれている。加賀五代藩主前田綱利(後に綱紀と改名)の命によって建てられていることがうかがえる。平成十年四月に、手向神社石殿とともに津幡町の文化財に指定されている。

以前は石殿が破損しており中を覗くことができたのだが、平成十二年に修復され、現在は中を覗けない。これらの石殿内部には祭神名が刻まれた石柱が納められている。刻まれている祭神名は「国常立命」、「素戔嗚命」、「菊理姫命」、「応神天皇」である。これは『社号書上帳』に記されている祭神名と一致しない。この石柱はもとの御神体の尊像を神仏分離の際に削り落とし、昭和二十八年、不動寺創建の際に金山穆韶和尚により祭神名が刻まれたと伝えられている。

四社権現に登る笏谷石製の百八段の石段は建立当時のものであるが、登り口の両部鳥居は大正二年に再建されている。現在の鳥居はこの一基のみであるが、天保四年の『加越能文庫』には坂の途中と坂の上にも鳥居が建てられていたことが記されている。また石殿前には鳥居の基石のみが現存しており、石殿前に置かれていた笏谷石製の狛犬の一体(吽形)が手向神社石殿の手前に移されている。

四社権現の石殿の中には神像ではなく本地仏の石像が御神体として祀られていたと思われるのだが、これらは本当にすべて壊されてしまったのであろうか。今回の調査をもとに、これら四社の御神体について考察したい。

大峰座主社の御神体

小矢部市松尾の路傍のコンクリート製の小堂内に、蔵王権現の石像が祀られている。この尊像は倶利伽羅山中から移されたと伝えられているのだが、詳細は不明である。笏谷石製で銘文は入っていない。角板型で、高さ61 cm、幅33 cm、奥行13 cm。奥行は最大の部分の寸法であり、板状の部分の厚みはわずか6 cmほどである。この形状は、前に倒れにくいが後ろには容易に倒れるものである。このことは、この尊像が石造の祠の奥壁に寄せて立てられるために作られたものであると考えられる。

四社権現の一つである大峰座主社は、国常立尊を祀り蔵王権現を本地仏としている。小矢部市松尾の石造蔵王権現は倶利伽羅から移されたと伝えられているので、大峰座主社の御神体であったと考えられる。四社権現の御神体は削り落とされ、その残欠の石柱が現存していると考えられていたのだが、その難を逃れて移されたのであろう。

四社権現の石殿は、峰御前八幡社を除く三社はほぼ同寸である。内寸は実測できないのだが、外寸から石材の厚みを差し引くと、高さ70 cm、幅45 cm、奥行30 cmほどになる。これは石殿の中に、蔵王権現の石像がちょうど納まる大きさである。

白山社の御神体

倶利伽羅不動寺駐車場横の小堂内に十体ほどの石仏が祀られており、その中に勝手明神と称される石像が祀られている。後述の倶利伽羅中坂の勝手明神と像容が似ているので、こちらも勝手明神と呼ばれている。明治の神仏分離の際に北川家に譲渡されていたのだが、昭和四十年頃不動寺に戻された。笏谷石製で銘文は入っていない。角板型で、高さ61 cm、幅34 cm、奥行13 cm。また、板状の部分の厚みは7 cmほどである。これは小矢部市松尾の蔵王権現とほぼ同寸である。また手法も酷似しているので、同じ石工によって同時に作られたものと思われる。したがってこれら二体の尊像は、同じ規格の石殿

に納められていたことがうかがえる。

『野仏』には、勝手明神社の御神体ではなく手向神社の末社であった富士社の御神体と考えられ、この尊像は木花開耶姫命であると思われると記述されている。四社権現の御神体の石像はすべて削り落とされ、残欠の石柱に祭神名が刻まれていると考えられていた。そうすると富士社の御神体のみが消息不明ということになり、どの末社の御神体であるのかわからないこの尊像がそれであると考えられたようだ。

この倶利伽羅不動寺の勝手明神は、四社権現の一つである白山社の御神体ではないかと考えられる。岩の上の蓮華に座し、左手に未開蓮を持ち、右手首に念珠を通している。板状の部分には舟型の光背が刻まれている。頭部にはいくつもの突起があり、菊理姫の本地の十一面観音のようである。

手向神社の石殿内には、この尊像と酷似した像容の石像が納められている。顔の部分などは破損しているが、持物は全く同じであり、こちらも十一面観音のように思われる。しかし手法がやや異なっており、他の白山社の御神体だったのではなかろうか。倶利伽羅集落となりの山森にあった白山社は、明治四十二年に竹橋の倶利伽羅神社に合祀されているが、社殿はそのまま残されている。もとの御神体が十一面観音であったならば、神仏分離の際に外へ出されて守られてきたと思われる。手向神社石殿内の十一面観音は、この山森白山社のもとの御神体だったのであろうか。現在の山森白山社には菩薩形立像(尊名不明)と女神立像(菊理姫であろうか)の二体の石像が御神体として祀られているのだが、これらの二体は明治に入ってからの作ではないかと思われる。

愛宕社の御神体

不動寺境内のコンクリート製の小堂内に、元禄十三年銘の石造不動明王が祀られており、その足元に石造延命地蔵が立てかけられている。

この地蔵は『野仏』には「由来等、何もわからない」と記述されている。笏谷石製で、高さ39 cm、幅16 cm、奥行12 cm。像の周りの左右と上の部分、そして裏面も人為的に削り落とされているのだが、これは神仏分離の際に少しでも小さくして、隠して守るための手段だったのかもしれない。もとは、先の蔵王権現や白山権現と同じ角板型の形状であったと考えられる。愛宕社の祭神は軻遇突智命であり、本地は将軍地蔵である。倶利伽羅周辺には該当する石造の将軍地蔵はみられない。しかし尾田氏によると、御神体の石像は将軍地蔵ではなく一般的な地蔵(延命地蔵)である場合が多いとのことである。倶利伽羅周辺には、この他には角板型の地蔵はみられないので、この地蔵が愛宕社の御神体だったのではなかろうか。

峰御前八幡社の御神体

長楽寺は高野山真言宗の寺院であるが、境内には阿弥陀堂が建てられていた。これは中興の祖である秀雅上人の建立によるものである。当時は一向一揆の勢力が強く、長楽寺は浄土真宗との共存を図ったのであろう。この阿弥陀堂には木造の阿弥陀如来像が祀られていたのだが、これは現在津幡町倉見の浄土宗専修庵の本尊となっている。また四社権現に登る石段は百八段である。これは浄土真宗の特色であり、これはその先に阿弥陀様が祀られていることをうかがわせるものである。

峰御前八幡社の祭神は応神天皇であり、その本地仏は阿弥陀如来である。したがってこの石殿内には石造の阿弥陀如来が祀られていたものと思われる。倶利伽羅山中には石造の阿弥陀如来が残されていないので、壊されずに残されているのであれば近隣の浄土宗寺院であろうかと考えた。

大峰座主社、白山社、愛宕社の御神体は角板型である。峰御前社の石殿は他の三社よりもひとまわり大きく、この四社の主格と思われる。したがってその御神体は、形態や手法が異なる石像であるかもしれない。

小矢部市埴生の浄土宗医王院には石造の阿弥陀如来座像が二体あり、丸彫りのほうの一体が倶利伽羅から移されたと伝えられている。表面が薄茶色に

汚れているのだが、笏谷石製のようである。阿弥陀像と蓮座は別石になっている。阿弥陀像の高さ36 cm、幅25 cm、奥行21 cm。蓮座の高さ8 cm、幅27 cm、奥行23 cm。この阿弥陀如来は丸彫りであるが、背中の部分はほぼ垂直で平らに作られている。これはこの尊像が、石造の祠の奥壁に寄せて立てられるためと考えられる。小矢部市内や津幡町内には数多くの石造阿弥陀如来がみられるが、他のものは背中が丸みをおびて作られており、このような作例はみられない。したがって、この阿弥陀如来は、峰御前八幡社の御神体であった可能性が高いと思われる。またこの阿弥陀如来像は、石殿に納められていた際には、蓮座の下に別の台石があったものと思われる。

倶利伽羅四社権現の石殿は硬くて丈夫な戸室石が用いられ、中に祀られた御神体は柔らかくて細密な造形に適した笏谷石が選ばれている。石殿は延宝五年に前田綱利の命によって建てられているので、中に祀られた御神体の石像はその際に綱利が越前で作らせたものであろう。

四社権現の石殿は津幡町の文化財に指定されているので、本来ならば祀られていた御神体も合わせて指定されるべきものではないだろうか。御神体であった石像は石殿内には残されておらず、現在は津幡町と小矢部市のあわせて三者の管理所有になっている。協力しあって保護されることを願う。

次に他の末社の御神体について考察したい。

山王社の御神体

猿ケ馬場に山王社(日吉社)の石殿が残されており、猿ケ堂と称されている。笏谷石製で、高さ104 cm。大きく破損しており、中の御神体が丸見えになっている。石殿の前に建てられていた鳥居は残されていない。『社号書上帳』には、日吉社の祭神は大山咋命と記述されている。破損した石殿の中には石造の神像が祀られている。笏谷石製で銘文は入っていない。角板型で、高さ55 cm、幅33 cm、奥行13 cm。上部と下部が欠損しており、もとは60～70 cmほどの高さであったと推測される。

『野仏』では、この神像は手向神社の末社であった山王社の御神体であり、大山咋命と思われるとされている。この御神体は仏像ではなく神像なので、神仏分離の際に壊されることがない。したがってそのまま山中に残されていたのであろう。山王社のあった場所から移動されていないようなので、山王社の御神体に間違いないと思われる。

猿ケ堂は天正年間建立と伝えられ、寛文六年の『倶利伽羅山中古絵図』には「サル堂」が描かれている。御神体の大山咋命は、この時期に作られたものなのか。この尊像は、四社権現の御神体のうちの三体の蔵王権現・白山権現・延命地蔵と用材・形態・手法がよく似ている。これらの尊像と同時期に作られたのではないかと思われる。「サル堂」にはもとは猿像が祀られており、その後山王社となった際にこの尊像が祀られたのだろうか。

勝手社の御神体

勝手社(勝手明神社)は山王社から長楽寺へ向かう途中の道の右手に建てられていたのだが、社殿や鳥居は残されていない。『社号書上帳』には、祭神については「神号不知」と記述されている。また『津幡町の神社と祭神の分析 倶利伽羅谷編』(平成十七年／宮本眞晴)には天忍穂耳命が祭神と記述されているのだが、その出典については記されていない。

勝手とは入り口のことと考えられ、勝手社とはその奥にある寺社を守る社のことであろう。したがってここでの勝手社は、長楽寺の入り口にあってその奥にある長楽寺を守る神社の意味と考えられる。勝手社は全国に点在しており、その祭神はまちまちである。各地の勝手社の御神体は武具を身に付けたものが多いのだが、これは入り口にあって奥の寺社を守る神の姿である。

倶利伽羅中坂の秀雅堂横のコンクリートブロック製の小堂内に、勝手明神と称される石像が祀られている。明治の神仏分離の際に俵家に譲渡されていたのだが、後にこの場所に戻された。笏谷石製で銘文は入っていない。舟光背型の座像で、高さ45 cm、幅26 cm、奥行13 cm。

この勝手明神は先の十一面観音と像容が似ているので、こちらが男神の勝手明神、十一面観音が女神の勝手明神と呼ばれていた。しかし形態や手法が異なっており、こちらは十一面観音よりも後に作られたものであろう。

この尊像は『野仏』には、尊名については勝手明神とだけ記されており、手向神社の末社であった勝手明神社の御神体であると記述されている。左手に未開蓮を持ち、右手には剣を持っており、この尊像は虚空蔵菩薩である。よく見ると光背の上部に蓮華が刻まれており、その上には虚空蔵菩薩の種子「タラーク」が刻まれている。

不動寺に残されている長楽寺の古文書には、長楽寺と石動山天平寺は密接な関係にあったことがうかがえるものがある。また先述の長楽寺墓地の墓標から、今石動城代との関係もうかがえる。前田利秀は、能登の石動山から大宮の虚空蔵菩薩(石動権現)を葭原の愛宕社に移した。葭原は池田と合併し、今石動の地名になった。

詳細な経緯は不明であるが、石動大宮の本地仏である虚空蔵菩薩を勝手社の御神体としたのであろう。そうすると、勝手社の祭神は石動大宮の祭神である伊弉諾命だったのかもしれない。

石動五社権現は、中央が大宮(祭神は伊弉諾命、本地は虚空蔵菩薩)で、右に白山宮(祭神は伊弉冉命、本地は十一面観音)と梅宮(祭神は天目一箇命、本地は将軍地蔵)、左に剣宮(祭神は市杵島姫命、本地は倶利伽羅不動)と火宮(祭神は大物主命、本地は蔵王権現)を配している。石動山麓の末寺や末社などにはいくつも五社権現絵像が残されており、将軍地蔵のかわりに不動明王を描いた五社権現絵像などもみられる。蔵王権現の木像もいくつか残されている。また石動山麓には、虚空蔵菩薩の種子「タラーク」を刻んだ自然石板碑がいくつかみられる。

稲荷社の御神体

稲荷社は、街道を挟んで勝手社の向かいに建てられていた。『社号書上帳』には倉稲魂命が祭神として記されている。倶利伽羅山中が描かれたいくつかの古絵図には、鳥居は描かれていない。しかし天保四年の『加越能文庫』の「加州寺社御普請所には全く記述されていない。『歴史秘話 倶利伽羅峠』には「堂はなく敷地現存、本尊は不動寺に現存」と記述されている。しかしこれには、本尊(御神体)の像容については記されていない。不動寺に移されているということなので、神像ではなく木造の仏像ではないかと考えられるのだが、不動寺に問い合わせても不明とのことである。

辻宮八幡社の御神体

辻宮八幡社は猿ケ馬場に建てられていた。『社号書上帳』には応神天皇が祭神として記されている。しかし天保四年の『加越能文庫』の「加州寺社御普請所には全く記述されていない。現在は和光堂の右手に石殿が移されている。この石殿は補修されており、屋根のみがもとの石殿のものなのであろうか。屋根は安山岩製、本体は凝灰岩製、基壇はコンクリートブロック製である。高さ105㎝。石殿の裏面に「石工／山口多八」の銘が刻まれており、この石工によって昭和戦後に修復されたものである。中を覗くことができないのだが、石殿内には石造の御神体が納められているのであろうか。

十握家の『手向神社の由来』には、手向神社は「明治四十年九月四日、字倶利伽羅の氏神、辻宮八幡社を合併した」とある。また『石川県神社庁ホームページ』によると、手向神社は神功皇后を合祀しているとされている。神功皇后は、辻宮八幡社の祭神である応神天皇の母であり、応神天皇と同じく八幡神とされている。合祀された際の経緯が気がかりである。手向神社の石殿内には、辻宮八幡社の御神体とみられる尊像は祀られていない。

富士社の御神体

富士社は『社号書上帳』に末社として掲載されているのだが、鎮座地が記されていない。天保四年の『加越能文庫』の「加州寺社御普請所には全く記

述されていない。また倶利伽羅山中が描かれたいくつかの古絵図などにも描かれていない。しかし『社号書上帳』には「神職 十握 喬 正龍／右家一助真言宗ニテ長楽寺ト称来候処、明治二年十二月復飾付候」の記述があり、祭神は木花開耶媛命と記されている。木花開耶媛命の本地は大日如来であるが、祀られていた御神体は不明である。『社号書上帳』には「社頭 六尺ニ五尺」と記述されており、これは他の末社と比べてかなり大きい。他の末社よりも後年に建てられた木造の社殿だったのではないだろうか。

津幡町竹橋の倶利伽羅神社の由来には、「同字無格社富士社を合併」と記されている。明治十三年の『石川県神社明細帳』には、竹橋の富士社は間口二間、奥行二間五尺と記されている。『社号書上帳』に記されている富士社とは社殿の大きさが異なっている。建て直されたのであろうか。

医王寺地蔵堂内の石造狛犬

先述の医王寺の阿弥陀如来の右には倶利伽羅から移されてきたと伝えられる石造不動明王があり、その足元には掌に乗るほど小さな石造の狛犬六体が並べられている。

六体の狛犬は大・中・小の三対であり、いずれも笏谷石製である。大きい狛犬は、高さ17 cm、幅８ cm、奥行13 cm。中型の狛犬は、高さ10.5 cm、幅４ cm、奥行７ cm。小さい狛犬は、高さ10 cm、幅3.5 cm、奥行5.5 cmである。中型と小型の像は阿形と吽形の区別がつかない。

これらの狛犬の由来等については不明であるが、倶利伽羅山中にあった手向神社の末社から移されたものではないかと思われるので併せて報告した。

竹橋倶利伽羅神社の沿革と祭神

竹橋宿は倶利伽羅峠に向かう最後の宿場町であった。旅人は朝竹橋を出発して、倶利伽羅峠で長楽寺を参拝し門前の茶屋で体を休め、夕方までには埴生から今石動宿に着いた。峠から最も近い竹橋宿には、倶利伽羅峠にみられる信仰が同様に根付いていたであろう。竹橋倶利伽羅神社の祭神や御神体の調査によってその片鱗を探ることができるであろうか。これらの調査も併せて報告しておきたい。

平成二十五年五月十日、十握龍也宮司と5名の調査員とで、竹橋倶利伽羅神社本殿内に祀られている御神体の調査を行った。

本殿は昭和五十一年に雪崩によって倒壊し、昭和五十三年に改築されている。本殿左手前には本殿改築記念碑が建てられている。

今回の調査で、本殿内に木像一体と石像七体の尊像を確認した。これらの御神体尊像の調査報告を行うにあたり、はじめに倶利伽羅神社の沿革と祭神について簡単に整理しておきたい。

津幡町竹橋の倶利伽羅神社は『石川県神社庁ホームページ』に、次のように記されている。（一部省略）

鎮座地／河北郡津幡町竹橋オ34

宮司／十握龍也

氏子区域／上藤又、下中、竹橋、鳥屋尾、彦太郎畠、宮田、山森

祭神／木花咲耶媛命、火結命、罔象女命、埴山比咩命、菊理比売命、伊弉諾命、誉田別命

由緒／勧請年月詳ならず。本社は小白社と称せし処。明治二十九年八月許可を得、小白神社と称す。同四十年四月十六日許可を得、同字無格社富士社、同河内社の二社を合併す。同四十二年五月一日許可を得、倶利伽羅神社と称す。

小白社の社名は津幡川の別称である小白川に由来するものであるが、小白社の祭神は不明である。

他の文献資料等によると、倶利伽羅神社は明治四十二年に山森の白山社、上藤又の藤又神社、下中の菅原神社を合併している。昭和二十六年に菅原神社、同三十一年に藤又神社が分離された。

『津幡町史』にも『神社明細帳』をもとにした祭神名が記されている。これには上記七柱の他に、天照大神と天満大神の2柱も合わせて祭神として記されている。この二柱は、それぞれ上藤又の藤又神社と下中の菅原神社の祭神であろうか。

また『石川県神社誌』には主祭神として、天照皇大御神、伊弉諾命、木花開耶姫命の三柱のみが記されている。

倶利伽羅神社に祀られている祭神について。

『津幡町史』に『神社明細帳』をもとにして記されている祭神は、次の九柱である。

◎伊弉諾命(伊邪那岐命)は、神世七代の第七代男神。伊弉冉命(伊邪那美命)を妻とする。天照大神、月夜見尊、素戔嗚命、住吉三神の父。初代天皇である神武天皇の七代先祖である。国家安泰の神。能登石動五社の本宮は伊弉諾命を祭神とし、虚空蔵菩薩を本地仏としている。石動本宮の御神体であった木造虚空蔵菩薩は、小矢部市八和町の愛宕神社から新富町の聖泉寺に移されている。

◎木花咲耶媛命(木花之佐久夜毘売)は大山祇神(大山津見神)の子。石長比売(磐長姫)の妹。天照大神の孫の瓊瓊杵尊(邇邇芸命)の妻。全国の浅間神社の総本山である富士山本宮浅間神社の祭神。社伝では、木花咲耶媛命は水の神であり、噴火を鎮めるために富士山に祀られたとしている。安産の神とも云われる。またホデリ・ホスセリ・ホオリを火中出産したことから火の神ともされる。初代天皇である神武天皇は、ホオリの孫である。木花咲耶媛命は酒解子神とも称され酒造の神ともされている。本地仏は大日如来。合祀された富士社の祭神と考えられる。

◎火結命は軻遇突智命(火之迦具土神)と同一神であり、伊弉諾命と伊弉冉命の子。愛宕神社総本社の若宮の祭神。愛宕神社における本地は将軍地蔵。また江戸時代以降、秋葉山本宮秋葉神社の祭神にもなった。秋葉神社では三尺坊を秋葉権現とする。火の神であり、火伏の神である。合祀された河内社の祭神と考えられる。

◎罔象女命(弥都波能売命)は伊弉諾命と伊弉冉命の子。軻遇突智命の妹。水の神。

◎埴山比咩命(波邇夜須毘売神)は榛名大神であり、は伊弉諾命と伊弉冉命の子。罔象女命と一緒に生まれた。軻遇突智命の妹であり妻でもある。土の神。

◎菊理比売命(菊理媛神)は白山比咩神と同一神。『古事記』には登場せず『日本書紀』の一説に記されているのみである。伊弉諾命と伊弉冉命を仲直りさせたとされる。白山三宮の祭神であったが、江戸時代初期より白山本宮の主祭神となった。本地仏は十一面観音。合祀された山森の白山社の祭神であろうか。

◎誉田別命は第十五代応神天皇で、仲哀天皇と神功皇后(気長足姫尊)の子。日本武尊の孫。仁徳天皇の父。全国の八幡神社の総本宮である宇佐神宮の祭神。本地仏は阿弥陀如来。

◎天照大神は伊弉諾命と伊弉冉命の子。素戔嗚命の姉。天忍穂耳命の母。神仏習合の思想では、神道においての最高神とされた。全国の神明神社の総本社である伊勢神宮内宮の主祭神。太陽神。本地仏は十一面観音であったが、後に大日如来とされた。上藤又の藤又神社の祭神と考えられる。

◎天満大神は菅原道真。官位は従二位、右大臣。贈正一位、大政大臣。学問の神。下中の菅原神社の祭神と考えられる。

竹橋倶利伽羅神社の御神体

本殿奥の扉を開けると手前に神鏡等が納められており、その奥の壁面には八体の尊像が立てかけられている。向って左の尊像から順に、一体ずつ取り出して調査を行った。

尊像の番号は、調査順に①～⑧とする。破損欠落している固体については、

現状における法量である。

①将軍地蔵。石像。笏谷石製で角板状。下部欠損。尊像を浮彫り。高さ46.5 cm、幅39 cm、奥行7.5 cm。武具を身にまとって馬に乗る。右手に錫杖を持っているが、左掌上の宝珠が欠落している。馬の頭等が欠落しているが、尊像の顔面は表情もはっきりとうかがえる。頭部には輪光が刻まれている。輪光上部には蓮葉が、その上には地蔵の種子である「カ」が刻まれている。裏面には水平に凸部が彫られていることから、石龕や石祠の側壁であったと考えられ、内面に尊像を浮彫りしていたものと考えられる。倶利伽羅神社に合祀された河内社の祭神は火結命(軻遇突智命)であることから、この尊像は、その本地の愛宕権現ではないかと考えられる。江戸時代前期の作と思われる。

②十一面観音。木像。舟光背型の、丸彫りに近い浮彫り立像。光背上部は破損したのだろうか、後補のものとみられる。もとは一木造りであったようだ。高さ84 cm、幅35 cm、奥行15 cm。台座部分に欠落があり、そのままでは立たない。左手に未開蓮を持ち、右手は施無畏印、蓮座上に立つ。やや稚拙だが、面長で優しい表情。頭部や衣等に彩色の跡がみられる。白毫が落ちている。江戸時代の作であろうか。十一面観音は白山社祭神である菊理比売命(菊理媛神)の本地と考えられるが、合祀された山森の白山社の御神体であったのかは不明である。小白社の祭神は不明であり、白山の神を祀っていたことも考えられる。

③尊名不明。石像。笏谷石製で角板状。上部欠損。立像を浮彫り。高さ63 cm、幅34 cm、奥行6 cm。①よりもやや上質の笏谷石とみられる。石龕や石祠の側壁であろうか、壁面に尊像を浮彫りしていたようで、このままでは立たない。左掌上に宝盆のようなものを持ち、右手に鉾のようなものを持って、蓮座様の台座に立つ。頭部は結髪状であり、忿怒相であろうか顔面に剥落があり、はっきりとしない。首からは、三個のドクロを胸飾りとして下げているようだ。神像あるいは明王部の尊像であろうか、尊名を特定できない。江戸時代前期の作と思われ、①よりもやや時代が遡るのではないだろうか。

④半跏地蔵。石像。薮田石製で、円光背型の丸彫りに近い浮彫り。光背が前かがみに彫られており、どっしりとして安定感がある。高さ50 cm、幅28 cm、奥行20 cm。左掌上に宝珠を、右手に錫杖を持ち、岩座に左足を下して座す。全体に丁寧な彫りで、ふっくらとした顔の表情等に優美さを感じる。非常に保存状態が良い。南北朝時代の作であろう。半跏地蔵については砺波市の尾田武雄氏が調査研究されており、富山県内で七十体ほどを確認されている。南砺市(旧福野町)安居の安居寺には、この尊像よりもひと回り小さい半跏地蔵が安置されており、富山県指定文化財となっている。石川県内でも能登地方を中心にいくつか報告されており、志賀町相神の相見神社境内の小堂内の半跏地蔵も同様に保存状態が良好な秀作である。

⑤尊名不明。石像。笏谷石製で角板状。下部欠損。立像を浮彫り。高さ40 cm、幅42 cm、奥行5 cm。胸より下の部分が全て欠落している。もとは70 cmほどあったのだろう。磨滅も激しくはっきりとしないが、武具を身にまとい、右手に錫杖を持っているようである。頭部には輪光が彫られており、上半身だけではあるが①に近い像容に見える。石龕や石祠の側壁であったと思われ、同じく江戸時代前期の作であろう。

⑥阿弥陀如来。石像。砂岩製で、粗く加工された自然石に座像を浮彫りする。定印を結んで座しているが、それ以上ははっきりとしない。中世の作であり、もともと目鼻や衣まで細かく彫られたものではない。墓標として直接土に刺すのであろう、最下部が少し細く加工されている。神社の御神体として彫られたものではないので、農耕地などから出土したものを納めたのであろう。

⑦尊名不明。石像。笏谷石製で、欠落が激しい。背面がやや丸みをおびているので、舟光背型であったかと思われる。高さ31 cm、幅25 cm、奥行5 cm。おおまかな外形からは、岩座上の蓮座に座す菩薩像のようである。顔面は

単に剥落しただけではなく、故意に削り落とされたようである。
⑧尊名不明。石像。笏谷石製で、欠落が激しい。⑦と同じく背面がやや丸みをおびているので、舟光背型であったかと思われる。高さ33 cm、幅26 cm、奥行5 cm。こちらも⑦と同じく、岩座上の蓮座に座す菩薩像のようである。
⑦⑧は形状や大きさが似ている。いずれも江戸時代前期の作とみられるが、①よりも時代が下るようだ。倶利伽羅神社には伊弉諾命と菊理比売命が祭神として祀られている。これらは石動本宮と白山本宮の祭神であり、能登と加賀を代表する山岳信仰の神である。⑦⑧はそれらの本地である虚空蔵菩薩と十一面観音ではなかろうか。倶利伽羅峠にも虚空蔵菩薩と白山権現が祀られており、この2体は似たような像容に彫られている。それと同様に作られたことも考えられる。像容がはっきりとせず尊名が特定できないので、推測の域を出ないのであるが…。

長楽寺に関係するその他の石塔・石仏

倶利伽羅の山中および周辺には、これらの他にも長楽寺に関係すると思われる石仏・石塔がいくつか残されている。その主なものを列記すると…
◎六地蔵：倶利伽羅中坂の秀雅堂向いの、コンクリートブロック製の堂内。長楽寺参道の子安堂より移動。笏谷石製の丸彫り立像で、高さ各108 cm。
◎不動明王：不動寺境内の、コンクリート製の堂内。砂坂より移動。笏谷石製の火焔光背型立像で、高さ68 cm。
「為金剛佛子一心弘栄法師三回忌」「元禄十三年九月朔日」「願主■■／施主高岡住人」
◎如意輪観音：不動寺境内の木造堂内。宮本家より移動。赤戸室石製の舟光背型座像で、高さ77 cm。
◎四面地蔵：不動寺境内の木造堂内。赤戸室石製の角柱型で、四面に地蔵立像を浮彫りしている。高さ61 cm。
「文政八酉年建之」「三界萬霊／願主加州金沢」
◎お万地蔵：不動寺境内の、コンクリート製の堂内。笏谷石製の丸彫り立像で、高さ78 cm。
◎不動明王：倶利伽羅不動ケ池の木造堂内。光背型の座像で、高さ48 cm。台石に「津幡講中」
◎地蔵：長楽寺墓地。笏谷石製の丸彫り立像で、高さ各83 cm。
◎不動明王：津幡町山森の白山社境内。笏谷石製の破風型。立像を浮彫りしている。上半身が故意に削り落とされているようである。高さ63 cm。
「光明真言百万編修行」「享和三癸亥年二月／有山信之／娘せん建之」
◎不動明王：小矢部市埴生の五社谷路傍。谷底より移動。笏谷石製の光背型座像。
◎馬頭観音、十一面観音、如意輪観音：小矢部市松永路傍の木造堂内。いずれも砂岩製の舟光背型座像で、高さ約80 cm。これらの三体は、御坊山より移動されたと伝えられる。
馬頭観音「高波屋／高道屋、十一面観音「能楽堂」
如意輪観音「施主 ■■■」
◎聖観音、千手観音、准胝観音：津幡町笠池ケ原路傍の木造堂内。いずれも砂岩製の舟光背型座像で、高さ約80 cm。これらの三体は、小矢部市松永路傍の三体と石材・法量・手法が同じであり、合わせて一組の六観音として作られたものと考えられる。
聖観音「…■／■■■■■」
千手観音「野田屋善右エ門母」
准胝観音「…(欠落)」
◎名号塔：小矢部市蓮沼横峯路傍。昭和六十二年に砂坂より移動。割石型。
「南无阿弥陀仏」「渋谷／今石動人足方」「嘉永六年」
◎不動明王：小矢部市埴生の医王院の、本堂と十王堂の間の地蔵堂内。笏谷石製の火焔光背型座像で、高さ72 cm。

◎宝篋印塔：小矢部市道林寺の南家庭園内。明治初頭、長楽寺廃寺に伴い手向神社より譲渡。白川石製で、高さ約約220㎝。

「奉造立奉献宝篋印塔／バーンク／倶利伽羅山」「経箔日／若有衆生能於此塔／一香一花禮拝供養／八十億劫生死重罪／一字消滅生免哭涙／死生佛家」「皆／享保十九甲寅年／三月廿一日」「施主／越中石動／土井夢閑／同／赤尾民致」

終わりに

今回の倶利伽羅峠およびその周辺の石造物等の調査では、竹橋倶利伽羅神社の十握龍也宮司にご協力をいただき、手向神社および倶利伽羅神社の御神体を調査することができた。大変貴重な資料を得ることができ、感謝したい。

今回の調査では、長楽寺に関係する石仏が、明治初頭の廃仏毀釈の際に壊されずに数多く守られてきていたことがわかった。

参考文献

『加賀能登史蹟の散歩』田中喜男（昭和四十六年）
『小矢部市史』小矢部市史編集委員会(昭和四十六年)
『津幡町史』津幡町史編纂委員会(昭和四十九年)
『津幡町の文化財 第一輯』津幡町教育委員会(昭和四十九年)
『日本海文化叢書 加越能寺社由来』金沢大学法文学部内日本海文化研究室(昭和五十年)
『倶利迦羅不動尊縁起』高山精一編(昭和五十一年)
『倶利伽羅龍王経典』高山精一編
『富山の石造美術』京田良志(昭和五十一年)
『石川県神社誌』石川県神社庁(昭和五十一年)
『石川県の歴史散歩』石川県高等学校社会科教育研究会(昭和五十二年)
『秀雅上人伝』高山精一(昭和五十五年)
『俵屋文書から見た 倶利伽羅峠乃村立』高山精一(昭和五十五年)
『民俗民芸双書90・信仰と民俗』小倉学(昭和五十七年)
『富山県歴史の道調査報告書 北陸街道』富山県教育委員会(昭和五十七年)
『越中の街道と石仏』塩照夫(昭和五十八年)
『歴史秘話 倶利伽羅峠』高山精一(昭和六十三年)
『ふるさとの石仏 第一～十二集』小矢部市婦人ボランティア育成講座ふるさとグループ
『津幡町の文化財 第二集・津幡町のみてあるき』津幡町教育委員会(平成四年)
『野仏』津幡町津幡公民館・たんぽぽグループ(平成四年)
『高野聖 金山穆韶』高山精一(平成四年)
『歴史の道調査報告書 第一集 北陸道』石川県教育委員会(平成六年)
『越前笏谷石』三井紀生(平成十四年)
『小矢部市の歴史と文化再見』小矢部市教育委員会・小矢部郷土史会(平成十五年)
『小矢部のいしぶみ 第一～十六集』いしぶみの会・小矢部市教育委員会
『竹橋のあゆみ』竹橋のあゆみ編集委員(平成十七年)
『つばたの石碑』津幡町教育委員会(平成十六年)
『津幡町の神社と祭神の分析 倶利伽羅谷編』宮本眞晴(平成十七年)
『歴史と文化・おやべ今昔 第一～四集』小矢部郷土史会
『埴生地区郷土史』埴生地区郷土史編集委員会(平成二十年)
『倶利伽邏山長楽寺系図』十握家
『手向神社の由来』十握家
『虚空蔵菩薩像の由来』聖泉寺
『小矢部市役所ホームページ』
『津幡町役場ホームページ』
『石川県神社庁ホームページ』
『倶利伽羅塾ホームページ』

長楽寺･手向神社年表

長楽寺歴代については秀雅のみ記述。不動寺については創建当初のみ記述。

《時 代》	《年 号》	《西暦》	《内 容》
上古時代			
飛鳥時代			
奈良時代前期			
奈良時代後期	養老 2年	718	善無畏三蔵が来錫、倶利迦羅龍王絵像を書き残す。(金沢市の宝集寺所蔵の倶利迦羅山古力迦羅竜王起源による)
	天平19年	747	『万葉集巻十七』に「刀奈美夜麻 多牟気能可味」と詠われる。
平安時代前期	弘仁 3年	812	空海が当地を巡錫、長楽寺建立。(金沢市の宝集寺所蔵の倶利迦羅山古力迦羅竜王起源による)
	元慶 2年	878	『三代實録巻三十三』に「元慶二年五月八日癸卯、授_越中國正六位上手向神從五位下_」と記述。
平安時代後期	寿永 2年	1183	猿が馬場周辺において、源平合戦。兵火により長楽寺焼失。勝軍木曽義仲より、長楽寺に太刀一振りを寄進。
鎌倉時代	建久 7年	1196	源頼朝が江守重頼に命じ、長楽寺に寺領を寄進。尊海によって、七堂伽藍建立にとりかかる。
南北朝時代			この頃、長楽寺不動堂の木造倶利伽羅不動(現在は不動寺の本尊)造立。
室町時代	天文16年	1547	秀雅が倶利伽羅村の百姓の子として生誕。
			この頃、長楽寺本尊の木造不動明王、愛染明王(いずれも現在は金沢市の宝集寺所蔵)造立。
			この頃、木造阿弥陀如来(現在は津幡町の専修庵の本尊)造立。
安土桃山時代	慶長 3年	1597	秀雅が安居寺より長楽寺に住転。
	慶長10年	1605	前田利常の援助により、秀雅が長楽寺再興を始める。
	慶長16年	1611	前田利常が、長楽寺御影堂(現在の手向神社石殿)建立を立願。利常より、寺領を寄進。七堂伽藍再建にとりかかる。
	慶長19年	1614	長楽寺御影堂落成。
	慶長20年	1615	一石五輪塔(手向神社石殿前に置かれている)造立。
	元和 5年	1619	長楽寺不動堂落成、秀雅書の扁額を掲げる。
	元和 7年	1621	前田利常より、寺領を寄進。
	寛永15年	1638	秀雅寂。
	同	同	この頃、長楽寺七堂伽藍完成。
	寛永19年	1642	泉州の仏師により、秀雅木像造立。(昭和32年、現在地に移動)
江戸時代前期			この頃、長楽寺の木造千手観音、空海像(いずれも現在は金沢市の宝集寺所蔵)造立。
			この頃、木造仁王、十王(現在は小矢部市の医王院所蔵)造立。
	延宝 5年	1677	前田綱利(綱紀)の命により、周傳が四社権現石殿を建立。 御神体の石像、狛犬等も同時に造立されたと思われる。
	元禄13年	1700	砂坂不動(現在は不動寺境内の小堂内に安置)造立。
江戸時代中期	享保19年	1734	長楽寺宝篋印塔(現在は小矢部市道林寺の南家所蔵)造立。

江戸時代後期	享和　3年	1803	山森白山社境内の石造不動明王造立。
	文政　8年	1825	石造四面地蔵(現在は不動寺境内の観音堂内に安置)造立。
	天保年間		この頃、御坊山の石造六観音造立と考えられる。
	天保　7年	1836	門前の茶屋からの出火により、長楽寺は宿坊以外を全焼。仏像や他の宝物等は、延焼前に持ち出された。その後、仮堂を建立。
	嘉永　6年	1853	砂坂の名号塔造立。(昭和62年、現在地に移動)
	安政年間		この頃、倶利伽羅峠三十三観音造立と考えられる。
明治時代	明治　2年	1869	神仏分離令により長楽寺廃寺。勝龍は十握喬として神職に専念。
	明治　4年	1871	長楽寺の仮堂を素戔嗚社とし、御影堂(現在の手向神社石殿)を摂社御影社とする。
	明治　5年	1872	素戔嗚社を手向社と改称。
	明治　6年	1873	手向社を郷社に列す。
			手向神社より、長楽寺の木造仏を宝集寺、医王院等に譲渡。
			この頃、長楽寺の石仏も各所に譲渡されたと思われる。
			この頃、御影社(現在の手向神社石殿)壁面の仏像を削り落とした。
	明治　7年	1874	手向社を手向神社と改称。
	明治41年	1908	無格社辻宮八幡社を手向神社に合祀。
大正時代			
昭和時代	昭和　9年	1934	十握家が倶利伽羅から竹橋に転住。
	昭和24年	1949	金山穆韶により、不動寺創建。
	昭和25年	1950	不動寺不動堂(河内御真影奉安殿を移築)落成。
	昭和26年	1951	不動寺白龍権現堂落成。
	昭和28年	1953	不動寺本堂(卯辰山忠魂祠堂を移築)仮落成。
			手向神社より、不動寺に木造倶利伽羅龍王を譲渡。不動寺の本尊とする。
			この頃、手向神社の木造本社社殿を解体し、御影社石殿を同地に移建して本社にしたと思われる。
			四社権現石殿を修復。金山穆韶書が祭神名を刻んだ石柱を御神体として納入。
	昭和35年	1960	不動寺境内の整備に伴い、手向神社石殿を移建。
	昭和47年	1972	手向神社石殿を現在地に移建。木造の覆殿、幣殿、拝殿を建立。
平成時代	平成12年	2000	四社権現石殿を修復。

津幡町倶利伽羅 手向神社石造神殿

峰御前八幡社石殿裏面の銘文
（平成７年、平井一雄氏撮影）

国見山頂の四社権現石殿、左端が峰御前八幡社（手向神社と合わせて五社権現と称する）

手向神社石鳥居残欠

手向神社石灯籠残欠

手向神社の石造大蛇（以前の御神体であろうか）

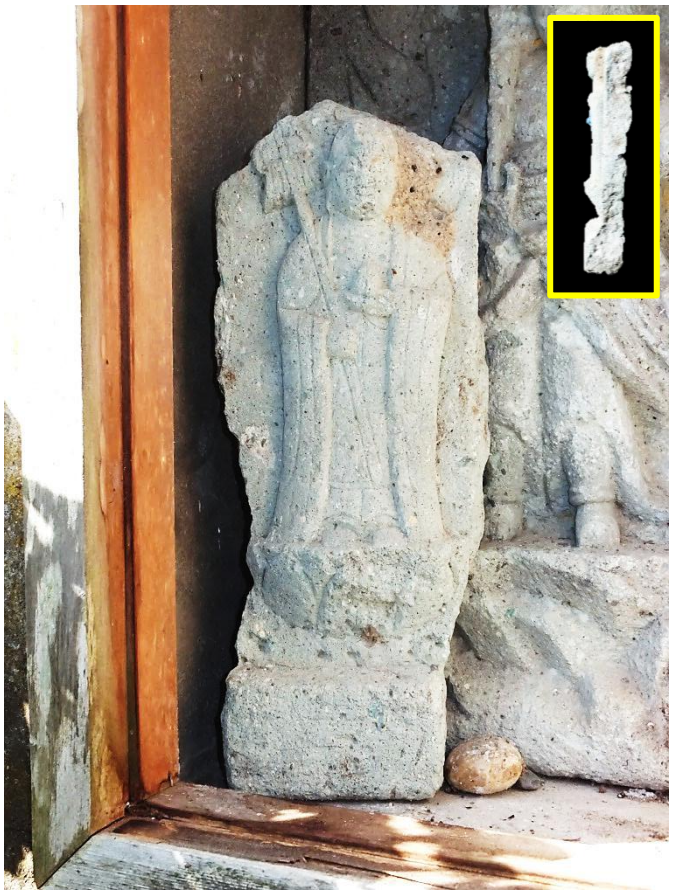
手向神社の狛犬
（四社権現石殿手前にあったもの）

手向神社石鬼面２点（石殿の屋根にあったもの）

手向神社の五輪塔
（中坂路傍より移動）

小矢部市松尾　路傍の蔵王権現
（大峰座主社の御神体と思われる）

津幡町倶利伽羅　不動寺の十一面観音
（白山社の御神体と思われる）



津幡町倶利伽羅　不動寺の延命地蔵
（愛宕社の御神体と思われる）

小矢部市埴生　医王院の阿弥陀如来
（峰御前八幡社の御神体と思われる）

小矢部市埴生猿ケ馬場 猿ケ堂の神像
（山王社御神体の石造大山咋命）

津幡町倶利伽羅中坂の勝手明神
（勝手社御神体の石造虚空蔵菩薩）

津幡町倶利伽羅 辻宮八幡社の石殿

小矢部市埴生 医王院の石造狛犬三対
（手向神社末社の狛犬であろうか）

第五代周傳墓標

第六代圭傳墓標

第十四代観秀墓標

倶利伽羅中坂の六地蔵

不動寺境内の不動明王

津幡町山森　白山社の不動明王

小矢部市埴生　医王院の不動明王

小矢部市道林寺　南家の宝篋印塔

御坊山の六観音

小矢部市松永の路傍の馬頭観音、十一面観音、如意輪観音

津幡町笠池ケ原の路傍の聖観音、千手観音、准胝観音

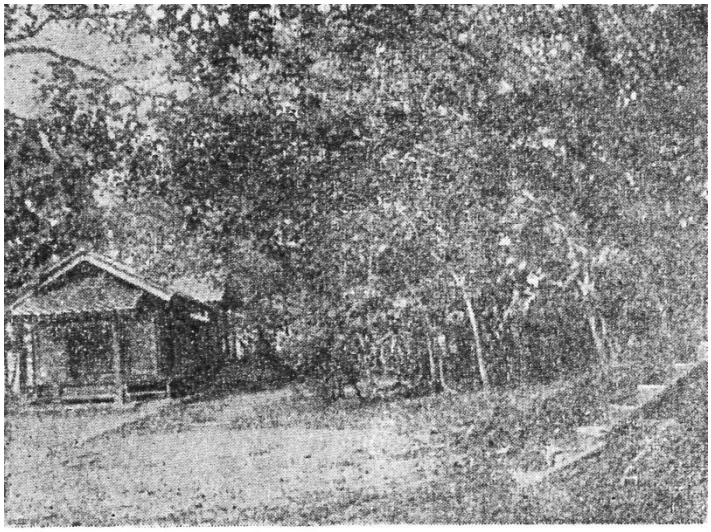
四社権現石殿と御神体石像の合成イメージ

峰御前八幡社（阿弥陀如来）　愛宕社（地蔵菩薩）　白山社（十一面観音）　大峰座主社（蔵王権現）

本社・末社一覧（社号および祭神は、明治４年の『社号書上帳』による）

社号	祭神	本地仏	御神体［現所在地］	旧鎮座地	現鎮座地　現御神体
素戔嗚社式外 七間四方（木造）	素戔嗚尊 養老二年勧請	倶利伽羅不動	木造倶利伽羅不動 ［不動寺（本尊）］	長楽寺	現存しない （天保７年焼失）
御影社 （手向神社） 慶長十九年建立 九尺四方	素戔嗚尊	倶利伽羅不動	石造倶利伽羅不動 →石造大蛇 ［手向神社］	現在の和光塔の位置	長楽寺跡に移建 神功皇后を合祀 石造倶利伽羅不動
峰御前八幡宮 （峰御前八幡社） 延宝五年建立 四尺五寸*三尺五寸	応神天皇 相殿菅原利家郷	阿弥陀如来	石造阿弥陀如来 ［医王院境内］	国見山頂	国見山頂 神号石柱
愛宕社 延宝五年建立 三尺五寸*三尺	軻遇突智命	将軍地蔵	石造延命地蔵 ［不動寺境内］	国見山頂	国見山頂 神号石柱
白山社 延宝五年建立 三尺五寸*三尺	菊理媛命	十一面観音	石造十一面観音 ［不動寺境内］	国見山頂	国見山頂 神号石柱
大峰座主社 延宝五年建立 三尺五寸*三尺	国常立尊	蔵王権現	石造蔵王権現 ［小矢部市松尾路傍］	国見山頂	国見山頂 神号石柱
日吉社 （山王社） 五尺*四尺五寸	大山咋命	薬師如来 または釈迦如来	石造大山咋命 ［猿ケ堂内］	猿ケ馬場	猿ケ馬場に猿ケ堂が遺存 石造大山咋命
勝手社 （勝手明神社） 三尺*二尺五寸	（神号不知）		石造虚空蔵菩薩 ［倶利伽羅中坂］	猿ケ馬場	現存しない
稲荷社 三尺*二尺五寸	倉稲魂命	荼枳尼天 または観音	不明 ［不動寺？］	猿ケ馬場	現存しない
辻宮八幡宮 （辻宮八幡社） 三尺*二尺五寸	応神天皇	阿弥陀如来	不明 ［辻宮八幡社石殿内？］	猿ケ馬場	手向神社に合祀 和光塔横に石殿 不明
富士社 六尺*五尺	木花開耶媛命	大日如来	不明 ［不明］	竹橋地内？	倶利伽羅神社に合祀 不明

文献に掲載されている写真



大正時代の手向神社（『石川県史蹟名勝調査報告第二輯』所載）

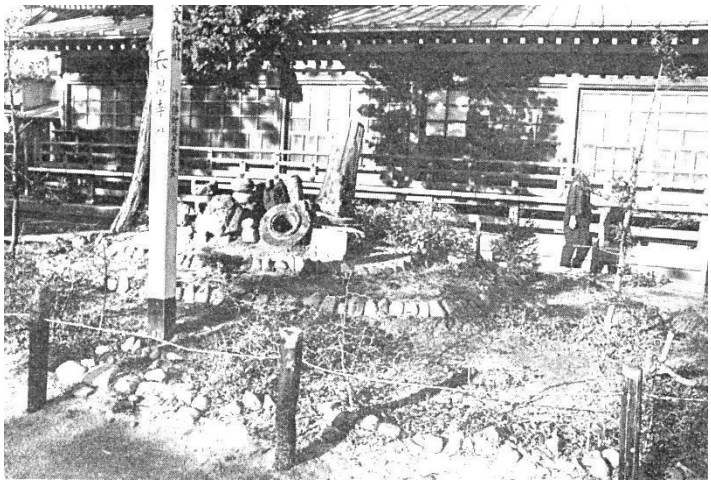
『津幡町史』より

当時の社殿は木造である。現在の手向神社の石殿は、右の段を登った所に建てられているのだろうか。『加賀能登史蹟の散歩』にも同様の写真が掲載されている。

越中との国境の古戦場に立つ手向神社の五社権現社殿

『石川県の歴史散歩』より

峰御前八幡社が左から２番目に建てられている。石殿の手前には２体の狛犬が置かれているので、盗難に遭う前に撮影されたものである。



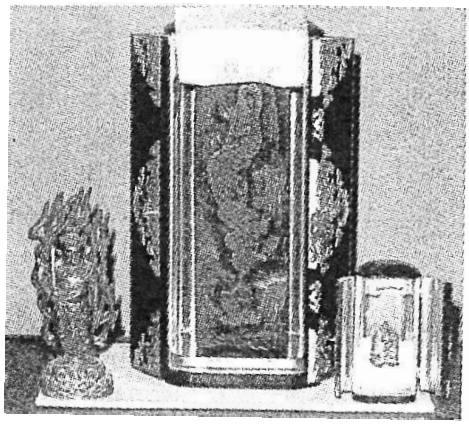
『津幡町の文化財 第一輯』より

長楽寺跡の標柱が建てられており、石造遺物が整然と置かれている。しかし石造の大蛇が写っていない。不動寺本堂が写っているが、手向神社覆殿の影がみられない。昭和３８年以降、４７年以前に撮影されたものである。『加賀能登史蹟の散歩』にも同様の写真が掲載されている。

手向神社より不動寺に譲渡された木像。

『津幡町史』より

手向神社より不動寺に譲渡された木像。向って右が制吒迦童子、左が衿迦羅童子。現在の手向神社御神体石像の手本である。



(右)倶利迦羅明王像
文政五年（１８２２）に江戸へ出開帳の時製作したと伝える鋳銅製像。裏に倶利迦羅不動と彫ってある

(中)手向神社神像版
神主十握喬（勝龍和尚）から十握家に伝えられてきた勝道作の手向之神
八岐の大蛇と天叢雲剣を線刻して祭神素戔嗚尊とする

(左)聖不動明王

『歴史秘話 倶利伽羅峠』より

十握家に伝えられた八岐大蛇と天叢雲剣を線刻した神像版(現在所在不明)がみられる。